



1



2



3

## 手を動かし 新しいことを見つける 面白さを実感します

**遠藤 主基**さん(4年生)

応用生物科学科  
植物細胞学研究室

小学生の頃から生物、主に植物に興味を持ち、大学では生命の神秘を解明したいと考えていました。研究室を選んだのは研究説明会で、遺伝子の転写の研究など、どここの研究室よりも進んだ研究ができると知ったから。植物の研究ではまだまだ解明されていないことが多く、やりがいを感じたのです。

卒論では、遺伝子の転写に取り組んでいます。酸性土壌に育つアカシアマンギウムを用いて、酸性土壌に強い遺伝子を食用植物に転用できないかと考えており、今はモデル実験に取り組んでいます。植物の場合、種から成育まで時間がかかるため、スケジュールを組んで計画的に実験をこなしていく必要があります。また、培地に細菌が入ってダメになるなど、ちょっとした油断が失敗につながる。なかなか思い通

りにはいきませんが、自分の手を動かすことで新しいものが見えてくることに面白さを感じています。

研究室では、論理的な考え方を身につけられました。最初は結果にばかり目がいき、例えば「遺伝子の転写はなぜ発現するか」といったことは考えていませんでしたが、実験に取り組む中で、一つひとつの過程を丁寧に見るようになり、自然に物事を順序立てて考えるようになりました。そして、研究の楽しさを知れたのが自分にとって一番の喜び。失敗さえも次へのモチベーションになる、そんなテーマに出会えたことがうれしいですね。

### 教員からヒトコト



**土屋 徳司**  
専任講師

学生は卒論で初めて、答えのない問いに向き合います。社会に出ると答えのないことばかりですから、卒論に取り組むことは、将来につながるいい経験になるはず。素直で何事にも一生懸命に取り組む遠藤君。今後も新しいことにどんどんチャレンジしてください。

- 1 未知の部分の多い植物。実験では、植物の不思議な能力を実感するという。
- 2 合言葉は『楽しくやろう』。研究室には実験の過程を楽しむ仲間が集まっている。
- 3 「生命現象を探れる研究室」と遠藤さん。新しい研究に挑戦できるのが魅力だ。